

朱子の「理」とエマソンの「理性」(Reason)の比較的考察

高 梨 良 夫

一 はじめに

エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803~82) が、明治、大正期の日本で、熱心に受け入れられ、愛読された理由の一つとして、当時の日本の知識人が、彼の思想のなかに、それまでに熱心に学習し、自らの素養や倫理道德の指針の一部としてきた新儒教の教義と類似していると思われる部分を見出したために、外来の思想という違和感をそれ程覚えずに受容することが可能であった、という点を指摘することが出来るのではないだろうか。明治、大正期の文人である岩野咆鳴、山路愛山、高安月郊などは、エマソンの超越主義思想 (Transcendentalism) の唯心論的傾向に注目し、新儒教の教義、特に陸象山、王陽明の「心即理」説との間に顕著な類似性があることを指摘している。

確かに青年期のエマソンには、「自己」を万物の中心に据える傾向が多分にみられ、客体の存在を人間主体と分離せずに、事物もまた主体の延長上にあり、人間主体と統一されるべきものとする、王陽明の「良知」に基づいた一元的で、道德実践的な世界観に類似していることを指摘することは可能である。しかし彼は中年期から後年期になると、進化論的自然観の影響を受けながら、「魂」はむしろ自然に内在し、人間は自然の一部として「魂」に関与すると考えるようになっていった。このようにして彼は、宇宙的大自然と一体化してゆく神概念に接近する傾向を示すようになってゆくのである。こうした自然観は、「理」を設定し、主体の心の理と客体の事物の理との統合を図ろうとする、朱子(一一三〇~一二〇〇)などの理気論に基づく「性即理」説や「格物致知」説により接近していると考えられる。それ故本稿では、朱子

の「理」とエマソンの「理性」(Reason)についての比較的考察を試みてみる。

二 朱子の「理」

まず朱子の教義の中心的概念となっている「理」とは何かについて考察してみる。朱子は、「陰陽五行の如きは、錯綜して条緒を失わざるは、便ち是れ理なり」と述べているように、気の働きに条理のある状態が理であり、通常理は筋目、筋道、条理などの意味に解されている。さらに朱子は、理を「所以然故」(然る所以の故)であると同時に、「所当然則」(当に然るべき所の則)であると定義している。「所以然故」とは、宇宙万物の根拠、根源的原理であり、また「所当然則」とは、もののものをあらしめている法則、規範である。さらに朱子は次のように述べて、理には、情意、考慮、作為、形体などを一切認めず、これらは「氣」に属するものとした。氣は物質的原理であり、ガス状の微細な物質から成り、万物を生成、凝集、離散させる「作用」を持つ。

蓋し氣は則ち能く凝結して造作するも、理は却つて情意無く、計度無く、造作無し。……氣の若きは則ち只だ是れ箇の淨潔空闊の世界にして、形迹無し。⁽²⁾

朱子は、理は「無声無臭」であり、感覚によってとはとらえることは出来ず、概念としてのみとらえることが出来るものとしている。そして理には存在と意味だけの消極的性格のみを認め、能動

的性格を与えることを一切拒否している。さらに知覚については、「曰く、専ら是れ氣なるにはあらず。是れ先に知覚の理有るも、理未だ知覚せず。氣聚まりて形を成し、理と氣と合して便ち能く知覚す⁽³⁾」と述べて、氣が凝集し、形体が形成された後、初めて可能となるのであり、理は知覚を超えたものであるとしている。

朱子はさらに、理は一つであると同時に一物に一理があるとして、絶対理と個別理の双方を認める程伊川から受け継いだ「理一分殊」の教義を、「曰く、理は一にして分は殊なると。天地万物を合せて言へば、只是一箇の理のみ。人に在るに及んでは、則ち又た各おの自ら一箇の理有り」と説いている。この「理一分殊」の教義には、「事法界」と「理法界」とが「一体不二」となった「理事無礙法界」を認める仏教哲学、特に華嚴宗の教理の影響が認められるとされている。⁽³⁾

さらにイギリス人の中国科学思想史研究家ジョセフ・ニードムは、理を「パターン」、あるいは「宇宙的組織の原理」と定義し、「形相」(form)、「法」(law)、「原理」(principle)、「理性」(ratio)などの西洋哲学の概念と結びつけて定義することに反対している。⁽⁶⁾

理と氣との関係については、朱子は次のように述べて、理は形而上のもの、すなわち道、性であり、一方氣は形而下のもの、すなわち器、形体であるとして、理と氣とを厳密に峻別する理氣論を展開している。

天地の間に理あり、氣あり。理なるものは形而上の道なり。

物を生ずるの本なり。気なるものは形而下の器なり。物を生ずる具なり。ここを以て人・物の生ずるは必ずこの理を稟け、然る後に性あり。必ずこの氣を稟け、然る後に形あり。その性その形、一身に外ならずと雖も、然れどもその道・器の間、分際甚だ明らかにして乱すべからざるなり。⁷⁾

さらに理と氣とは別のものではあるが、同時に氣がなくては理の存在はあり得ず、理氣の間に先後はないと、理氣の共在について次のように述べている。

此れ本より先後の言ふ可き無し。然れども必ず其の從つて来る所を推さんと欲せば、則ち須く先ず是の理有りと説ふべし。然れども理は又た別に一物為るには非ず。即ち是の氣の中に存す。是の氣無くんば、則ち是の理も亦た掛搭する所無し。⁸⁾

理と氣の關係は「体用」の論理に基づいている。キリスト教のような人格神、創造神を持たない中国思想においては、仏教から採り入れた「体用」の論理が盛んに用いられた。「体用」の關係とは、実体と作用、本体と現象の關係とみなすことが出来る。この論理は二元論的に思われるが、西洋思想にみられるような精神と物質の分離に基づくような二元論ではない。朱子学においては、「氣」が精神と物質の双方を生み出すのである。

三 エマソンの「理性」(Reason)

次にエマソンの「理性」について考察してみる。彼は『自然

(Nature, 1836) において、次のように述べて、「理性」を「普遍的な魂」(a universal soul)、あるいは「靈」(Spirit) と同一視している。

人は、個人としての自分のいのちの内部あるいは背後に普遍的な魂があり、そのなかに、大空さながら、「正義」、「真理」、「愛」、「自由」の本性がさし昇り、輝くことを知っている。この普遍的な魂を人は「理性」と呼ぶ。それは私のものでも、あなたのものでも、彼のものでもなく、我々の方がそれに属している。我々は「理性」の所有物であり、配下なのである。そしてこの私的な地球が埋もれてしまう青空、悠久の静寂を備え、不朽の天体に満ちている空が「理性」の象徴である。我々は知的に考えると「理性」と呼ぶものを、自然との關係で考えた場合には「靈」と呼ぶ。「靈」は「創造主」である。「靈」は自らのうちにいのちをもっている。そしてあらゆる時代あらゆる国の人間が、それぞれの言葉でそれを「父」として表現する。⁹⁾

エマソンは、人間の内部に平等に与えられているが、それに気づかないでいる「理性」に目覚めよと述べ、それが人生の目的であると訴える。彼はまた、事物に対する靈の優位を主張し、「理性」の目が開くことにより、人間は事物の束縛から解放されて自由になり、事物より優位に立つことが出来ると、次のように述べる。

自然が絶対的に存在していると考える一種の本能的な信念は、

感覚と蘇りを知らぬ悟性のものだ。こういう見方をすると、人間と自然はしっかりと結合している。事物は究極であり、事物のあなたに目を向けることは決してない。「理性」が出現すると、こうした信念を打ち壊してしまう。まるで我々が自然の一部であるかのように、我々を自然に結びつけている感覚の専横を、まず思考はゆるめようとし、自然は離れていて、しかもいわずに浮いていることを、我々に教えてくれる。⁽⁹⁾さらにエマソンにとっては、事物と霊とは完全に分離しているのではなかった。肉眼では固定しているように見える自然も、理性の目で見れば、流動化し、透明になってくるのである。事物を離れたところに霊があるのではなく、事物に霊が流入することによって、事物が変容し、霊化するのである。

君が君の生活を精神のなかに宿る純粹な理念に従わせれば、たちまちにして壮大な可能性が開けてくるであろう。事物における革命も、いったん霊が流入すれば、これに呼応して起こるだろう。⁽¹⁰⁾

このようにして「理性」の目が開くことにより、人間は新しい目で世界を見るようになる。エマソンが訴える「だから君自身の世界を打ち立てなさい」とは、事物を中心とした世界を「捨象」するのではなく、「克服」することによって、「魂」(soul)を中心とした世界を再構築することを意味している。

四 朱子の「理」とエマソンの “Reason”の比較的考察

最後に、朱子の「理」とエマソンの“Reason”についての比較的考察を試みてみる。まず両者の類似点を挙げてみる。第一に、朱子もエマソンも、世界は現象界だけから成るとする唯物論的な合理主義、功利主義に基づく世界観に反対し、事物から成る可視的な現象界は究極ではなく、その背後に現象界を存在させる本源となっている不可視の世界が存在することを示すために、「理」及び“Reason”という哲学上の用語を用いた点で共通している。

朱子は、事功学派の功利主義に反対し、また気を重視する論に対して、理を形而上のもの、気を形而下のものとして、理と気を厳密に峻別する理気論を展開し、理を感覚によってはとらえることの出来ない超自然的なものとした。エマソンもまた、当時の合理主義思想や機械論的自然観に反対し、“Reason”と“Under-standing”とを区別すると同時に、“Reason”を自然界には属さず、超自然界から自然、人間に働きかける「法」、「霊」と同一のものとしている。

類似点の第二に、朱子の「理」もエマソンの“Reason”も、人間界、自然界の双方に及ぶ統一的な原理であるという点でも共通している。朱子の「理」は、「所以然故」として生成・流行する陰陽の世界の存在の根拠であると同時に、「所当然則」として

道徳的規範でもあった。エマソンの“Reason”もまた、それ自体が最高の真理であり、万物の普遍的、根源的原理であると同時に、真理を把握するために人間に賦与された高級な能力でもあった。“Reason”は“Law”と結びついており、エマソン思想の根本的原理は、自然法則 (natural law) と道徳律 (moral law) との一致であった。

第三に、朱子は、太極は万理を具えていると同時に、一物にも一理が宿しているとする「理一分殊」の教義を唱えたが、これは全体は個があつて、また個は全体の部分となつて初めて意味を持つとするエマソンの“Each and All”の考えと共通している。朱子において個別理が絶対理と結びついてゆくように、エマソンにおいても個別的な“soul”を通じて自然、人間は普遍的な「大霊」(The Over-Soul)と結びついてゆく。また朱子は理と氣とを峻別したが、理は氣を離れては存在し得ないとも主張した。エマソンもまた、“Reason”は超自然的性質を有するが、自然及び人間精神を通じて働きかけ、事物から分離するのではなく、事物を変容させ、命を与える霊的な力であるとしている。このように朱子もエマソンも共に、合理主義的、功利主義的思想に反対しているばかりではなく、現実の社会から遊離した、超越主義的あるいは超絶主義的な世界観——朱子の場合は、仏教の寂滅主義、道教の虚無主義に對して、またエマソンの場合は、超越主義の現実輕視の傾向に對して——とも一線を画し、それを克服し、理念と

現実との間の均衡を図ろうと試みているのである。

第四に、朱子の「理」は、人間の知的認識のみならず、道徳的実践・行為とも結びついているという点で、エマソンの“Reason”と顕著な共通性を持つている。朱子は、人間は個物の理の探究・把握から始めて、太極たる万物の理に到達することによって、自らの知を完成させることが出来るとする「格物致知」の教説を説いた。ここにおいては知の完成は同時に徳の完成でもあり、自然の理と人事の理、知識知と道徳知は不可分に結びついている。一方青年期の思想形成期にコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772~1834) の多大な影響を受けたエマソン⁽¹⁷⁾は、“Reason”は人間の魂に内在する「道徳的本性」(moral nature)、「内なる神」(God within)であり、人間は“Reason”の働きにより、宇宙の神を認識し、近づくことが出来るとした。

コールリッジ及びエマソンの「理性」と「悟性」の区別に関する理解には明らかにカント哲学に對する誤解がみられる⁽¹⁸⁾。両者は、理性を普遍的・永遠的な理想を対象としている点ではカントと同様ではあるが、真理の直接的な把握をする「知的直観」を認めている点に決定的な相違がみられる。これは両者がカントと同様に理論理性と実践理性とを区別しながらも、実践理性を拡張的に解釈し、直感に近い意味で用いたことによる。

カントにとっては、エマソンのように、人間の魂が宇宙的な魂と「直感」を通じて直接的に合一することを可能にする「大霊」

のような超越的神概念を抱くことは、人間の理性の限界を超える事柄であった。カントは、理性は悟性の概念化する働きを導き、超感覚的世界を思维の対象とすることを可能にはするが、絶対的なものに関する「認識」を与えることはないとして、理性に「構成的」な役割を認めず、純粹に「統整的」な役割に限定した。カントは、人間の「経験」から独立した「物自体」の存在を認識することの思弁的傲慢を非難し、「生得観念」とプラトンがイデアを認識する作用として説いた「知的直感」とを否定したのである。

次に朱子の「理」とハッソンの「Reason」の相違点について考察してみる。まず朱子の「理」には事物を造る働きは一切認めることが出来ないという点¹⁷、ハッソンの「Reason」とは本質的に異なる。ハッソンの「Reason」は、神的、超自然的な「働き」、「力」であって、「創造 (creation)」と密接に結びついている。したがって「理」と「Reason」は、超自然的な性質を有するという点では共通しているが、「理」は存在と意味だけの消極的な性質を具えているに過ぎず、「Reason」のように事物を靈的に変容させ、創造するという能動的な性質を具えてはいない点で明らかに相違している。

第二に、朱子の「理」は、「天」と一体化した絶対理たる「天理」として、宇宙人生を貫く根源的な理法であると同時に、個別理として個物に付与された場合は「性」であり、人間のみならず、動物、植物、事物にも内在しているとされている。それに対して

ハッソンの「Reason」は、宇宙万物を統一的に支配している「Law」を全的に認識し、超越的世界と一体化することが出来るように、人間のみに賦与されている高級な知的、道德的、意志的能力であり、動物、植物、事物には賦与されていないという点に、朱子の「理」との決定的な相違が認められる。天からの「命」により、人間に賦与されている仁義礼智信の五常としての「性」に限定するならば、朱子の「理」は、人間の道德的本性としてのハッソンの「Reason」と類似性を有しているといえるであろう。

第三に、朱子の「理」には知的、道德・倫理的な性質が顕著に認められるが、美的、芸術的な領域との直接的な関係を認めることが出来ない。他方ハッソンの「Reason」には表象性が認められ、「想像力」(imagination)と密接に結びつき¹⁸、詩文学や人間の芸術的行為とも密接に関係している。これはエマソンの「Reason」が、原理のもとに統一する能力として「創造」と結びついているのに対して、朱子の「理」は、気による万物生成とは次元を異にしながらも、氣に秩序を与える原理として「生生」と結びついていることに起因していると考えられる。コールリッジの想像力説の影響を受けたエマソンは、詩芸術論、象徴論を展開したが、朱子は、詩文などの文芸に深い理解を示しながらも、理氣論、格物致知論を超えた詩芸術論、象徴的言語論を自らの思想体系のなかに持つことはなかった。また朱子の理想的人物像とし

での「聖人」においては、知的・道徳的真理を認識し、善を行う側面が重視され、美的真理を愛し、表現する詩人としての側面は重視されていない。それに対してエマソンにおいては、「想像力」を最大限に行使する「詩人」は、彼の理想的人物像のなかで重要な位置を占めているのである。

- (1) 『朱子語類』巻一・一二
- (2) 同、巻一・一三
- (3) 同、巻五・二四
- (4) 同、巻一・八
- (5) 『比較思想事典』(東京書籍、二〇〇〇年)、四七三頁
- (6) Joseph Needham, *Science and Civilisation in China*, vol. 2: *History of Scientific Thought* (Cambridge University Press, 1956), pp. 472~85.
- (7) 『朱子文集』巻五八、黄道夫に答ふ・一
- (8) 『朱子語類』巻一・一一
- (9) Alfred R. Ferguson et al. eds., *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, 6 vols. to date (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1971-), vol. 1, pp. 18~19. 訳文は、酒本雅之訳『エマソン論文集』上巻(岩波文庫、一九七二年)、斎藤光訳『自然について』、『エマソン選集』第一巻(日本教文社、一九六〇年)を参考にした。本文中の以下の訳文も同様である。
- (10) *Ibid.*, p. 30.
- (11) *Ibid.*, p. 45.
- (12) *Ibid.*, p. 45.
- (13) エマソンの註“Each and All”参照。Edward Waldo Emerson

ed., *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, 12 vols. (Boston: Houghton Mifflin, 1903~04) vol. 9, pp. 4~6.

- (14) エマソンが超越主義思想に接近する契機となったのは、マーシエ(James Marsh, 1794~1842)の編集により一八二九年に出版されたコールリッジの『内省への助け』(*Aids to Reflection*, 1825)であった。

- (15) コールリッジの理性と悟性については、W. G. T. Sheed, ed., *The Complete Works of Samuel Taylor Coleridge*, 6 vols. (Reproduced by Rinsen Book Co., Kyoto, 1989, from the first edition of 1863 published by Harper & Brothers, New York), vol. 2, pp. 143~50 参照。

- (16) カントの理性と悟性については、岩崎武雄『カントとドイツ観念論』(岩崎武雄著作集)第二巻(新地書房、一九八一年)、一四~九九頁、岩崎武雄『西洋哲学史』(岩崎武雄著作集)第三巻(新地書房、一九八一年)、一七四~二〇四頁参照。

- (17) 安田二郎『中国近世思想研究』(筑摩書房、一九七六年)に収められた一篇「朱子の存在論に於ける「理」の性質について」(六三~一〇二頁)において、安田は理とイデア、ロコスとの類似点、相違点について論じている。

- (18) 理性と想像力の関係については、田村謙二『コールリッジの創造的精神―統一性・分裂・統一性の回復』(英宝社、一九九七年)、一七七~二八八頁参照。

- (19) 朱子の文芸論については、林田慎之助『朱子の文芸論』、『朱子學入門』朱子學大系第一巻(明徳出版社、一九七四年)、三八三~九六頁参照。

(たかなし・よしお、アメリカ文学、長野県短期大学教授)

(付記)

本稿は平成十九年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。